

< 翻訳 >

神の力の有効性と直接的神認識
——カール・バルト『ローマ書講解』第一版（1919年）
第一章邦訳・解題——

木村 里奈

解題

カール・バルト（1886-1968）は二十世紀のもっとも重要な神学者の一人である。彼は生前多くの著作を遺したが、初期における主著の一つが『ローマ書講解（*Der Römerbrief*）』である。『ローマ書講解』は1919年の初版から六回改訂が重ねられているが、1922年に出版された第二版の序文において、彼はそれを「ほとんど初版の原形をとどめない程度 of 全面的な大改訂」⁽¹⁾であると述べている。実際に第一版と第二版では章題や章の分け方だけでなく、本文も大幅に書き換えられている。このような「大改訂」は第一版と第二版の間のみで行なわれ、第三版以降は大きな変更は見られない。そして当時の神学界に彼の名を知らしめ、現在まで『ローマ書講解』として知られ、研究されてきたのはほとんどが第二版以降のものである。

バルトは大学での勉学を終えた後、1909年にスイスのジュネーヴで副牧師を務め、1911年にザーフェンヴィル村の牧師に就任している。⁽²⁾『ローマ書講解』の執筆が開始されたのは、その地に来てから五年後の1916年である。この時期のドイツおよびその周辺地域は急速に近代化し、資本主義社会が一定の成熟度に達していた。⁽³⁾しかしその一方で貧富の差の拡大や過酷な労働状況から、社会主義運動が活発になっていた時期でもある。バルト自身、学生時代から社会問題に対して大きな関心を持ち、1910年には社会主義的な考え方を表明しようという

興奮を覚えることがあったと述べている。⁽⁴⁾そして大学を出た後に実際の社会状況を目の当たりにし、その問題意識を強め、社会主義運動に身を投じていった。⁽⁵⁾しかし、第一次世界大戦へと世が歩みを進めるにつれて、愛国的傾向を強めていく宗教社会主義者や、バルトが学生時代に師事していた自由主義的な神学者たちに対する不信を強めていったのである。⁽⁶⁾

このような状況下で執筆されたのが『ローマ書講解』である。この著書でバルトは、あらゆる人間の行為の神学的正当化を徹底的に批判するという立場を取る。バルトは神と人間との断絶を強調することによって、社会主義および宗教社会主義のみならず、十九世紀的な自由主義的神学に対しても批判をした。⁽⁷⁾言い換えると、人間が信仰を所有することによって神に義とされることを否定したのである。このような方法ゆえに、『ローマ書講解』はそれ以前の神学からの脱却であると考えられていた。しかし、「神－人」関係における断絶の強調は第二版になって顕著になったものである。⁽⁸⁾第一版においては、「神－人」関係はむしろ直接的であるものとして論じられている。⁽⁹⁾それゆえに、第一版は依然として前世紀の神学の影響の下にあるものとして考えられてきた。⁽¹⁰⁾

しかし、バルトが第一版において「神－人」関係を直接的なものとして論じたのは、人間による信仰の所有の不可能性を示すためである。これは、第一版と第二版の神認識を比較することで明らかとなる。⁽¹¹⁾両者において、信仰とは瞬間ごとに神から与えられるものだという一貫した主張がある。しかしそれが第一版においては、神と人間との無媒介的直接的関係の中で「捕えられて理解すること (das ergriffene Ergreifen)」⁽¹²⁾ という神認識に基礎づけられている。一方で、第二版でそれは「神の認識不可能性の認識」という神認識に基づいている。つまり、バルトは第一版でもすでに信仰の所有の不可能性を述べていたが、第二版では論法を変えることによってそれを先鋭化したのであると考えられる。第二版のこのような改訂の意図は第一版を踏まえなければ見えてこない。

また、社会主義的な活動をしていた時期から『ローマ書講解』時期にかけての思想的変遷も連続的に捉えられるべきである。つまり、バルトが当時社会主義運

動に従事していた理由と、『ローマ書講解』における社会主義および十九世紀的神学への批判には共通する思想がある。それは神の国の実効力である。バルトは第一版において神の国を実効力のあるもの、つまり人間をこの世において実際に動かすものとして述べている。⁽¹³⁾ それはバルトが社会主義運動に参加し、そしてまさにそこに求めていたものであった。例えば1911年の「ジョン・モットとキリスト教学生運動」において、バルトはスイスの社会主義者を批判した上で、モットの中にまことに実際的な社会主義を見て取ることができると述べている。⁽¹⁴⁾ これは彼がその場で聴衆を実際に運動へと動かしたことを指してのものである。当時のバルトは神の国の到来の準備段階として、まず人間が変わらなければならないと考えていた。⁽¹⁵⁾ それは、キリスト教が単なる概念ではなく、実際に人を動かすものであるとの考えに基づくものである。つまり『ローマ書講解』第一版では社会主義を批判しているものの、神の国がこの世に対して有効性のあるものであるという点においては一貫しているのである。

社会主義に参加していた時期の諸論文と、『ローマ書講解』第一版とでは神の力の有効性が一貫して主張されていることから、それが、バルトが第一版を執筆する以前から求めていたものであると考えられる。後に社会主義を批判する立場にまわったのも、人間ではなく「神」の国の有効性を際立たせるためであると考えられる。また、第一版と第二版には信仰の動性という共通点があるが、第二版では直接的な「神-人」関係を棄てて両者の間の断絶を説いたのも、この信仰の動性を強調するためである。これらの視点は『ローマ書講解』以前のバルトと第一版、そして第一版と第二版を比較しなければ得られないものである。

『ローマ書講解』第一版は当時、わずかに1000部が刷られただけで、広く読まれることはなく、第一版が再版されたのは1980年代に入ってからであった。⁽¹⁶⁾ それゆえに第一版についての研究は今まであまりなされていない。しかしながら先に述べたとおり、第一版を研究することは、社会主義時代のバルトおよび『ローマ書講解』第二版を見直すための重要な視座を与える。初期のバルトの神学が広く再考されるために、その一歩としてこの翻訳が役立つことを期待する。

凡例

1. 当邦訳の原著は、Karl Barth, *Der Römerbrief: (erste Fassung, 1919), Gesamtausgabe. II Akademische Werke 16*, hrsg. Hermann Schmidt (Theologischer Verlag, Zürich, 1985) である。
2. 本文中のボールド体は原著のボールド体をそのまま用いた。また、原著においてイタリック体であったものは、本文中では傍点によって示した。
3. 本文中の (……) および [……] は原著の括弧をそのまま用いた。(……) はバルト本人によるもの、[……] は原著編者によるもの、《……》は本稿訳者による注記である。原著の «……» は本文中では「……」にあらためた。また、一部 (……) で原著のドイツ語を補ったが、それは訳者によるものである。
4. 当邦訳の注は原著の注にならったものである。引用出典に邦訳がすでにあるものについては既出のものに従い、その訳者、表題、出典、ページ数をあげた。特に注記のないものについては本訳者の訳である。

注

- (1) カール・バルト「ローマ書」『カール・バルト著作集 14』吉村善夫訳（新教出版社、1967年）所収、4頁。
- (2) エーバーハルト・ブッシュ『カール・バルトの生涯 1886-1968』小川圭治訳（新教出版社、1989年）、71、86頁。
- (3) 大崎節郎『カール・バルトのローマ書研究』（新教出版社、1987年）、12頁。
- (4) ブッシュ『カール・バルトの生涯 1886-1968』、52、76-77頁。
- (5) 同上、101-102頁。
- (6) バルト「十九世紀の福音主義神学」『カール・バルト著作集 4』井上良雄、小川圭治、吉永正義訳（新教出版社、1999年）所収、254-255頁。
- (7) Timothy Gorringer, *Karl Barth: Against Hegemony* (New York: Oxford University Press, 1999), 41.
- (8) バルト「序言」『カール・バルト著作集 14』吉村善夫訳（新教出版社、1979年）所収、12-13頁。
- (9) Karl Barth, *Der Römerbrief: (erste Fassung, 1919), Gesamtausgabe. II Akademische Werke*

16 (Zürich: Theologischer Verlag), S. 22.

- (10) T・F・トーランス『バルト初期神学の展開：1910-1931』吉田信夫訳（現代神学双書、1977年）、64頁。
- (11) 『ローマ書講解』第一版における信仰所有の不可能性は、無媒介的直接的関係において「捕らえられて理解する」という概念化なしの神認識に基づいている。その一方で第二版における信仰所有の不可能性は、神の認識不可能性の認識という背理的な神認識に基づいている。両者の比較については拙論「カール・バルトの『ローマ書』における「神認識」——第一版と第二版の比較研究——」『ICU比較文化』第46号（国際基督教大学比較文化研究会、2014年）所収、65-90頁を参照。
- (12) Barth, *Der Römerbrief: (erste Fassung, 1919)*, S. 26.
- (13) *Ibid.*, S. 82-83, 309.
- (14) バルト「ジョン・モットとキリスト教学生運動」『カール・バルト著作集 5』井上良雄、吉永正義訳（新教出版社、1986年）所収、18頁。
- (15) バルト「イエス・キリストと社会運動」『カール・バルト著作集 6』雨宮栄一、井上良雄訳（新教出版社、1969年）所収、14頁。
- (16) ブッシュ『カール・バルトの生涯 1886-1968』、148頁。

『ローマ書講解』第一版（1919年）

——第一章——

序文

筆者から読者へ（1:1-7）

パウロ、キリストであるイエスの僕、使徒として召し出され、かつ彼の福音のために選び出されし者。この福音は、これまでに聖書の中で神が彼の預言者たちを通して約束してきたものであり、御子に関するものである。御子は肉によればダビデの血筋から生まれ、聖霊によれば死者の中からの復活において、御業において神の御子と定められた。召し出し選びしは、我々の主、イエス・キリスト。主を通して、我々は恩寵を授かるとともに、万民の間にあって信仰の服従をなして主の御名の栄光——あなたがたもその栄光のもとにあり、よってイエス・キリストによって召し出された者たちなのだが——を増すという使徒の務めを授かった。このパウロから、ローマにおり神に愛されたすべての人々、すなわち召し出された聖なる人々へ！我々の父なる神と主イエス・キリストからの安らぎと恩寵があなたがたにあるように！⁽¹⁾

「自分自身の創作に熱中していた天才ではなく」（ツェンデル）⁽²⁾、ここで発言しているのは、手足を拘束されている人間である。彼はもはや自分自身の主人ではなく、僕として他者に服従する一人の人間である。彼は自分自身の力で、彼がそうであるところのものになったのではない。彼はそのように召し出されたのである。彼は自分自身の力で彼がいるところに立っているのではない。彼はより高次の賜物と使命によって、彼がかつて自分で選んだ、人間的に定められた人生のつながりの外へ取り出されたのである。彼は一人の選び出された者であり、より高次の秩序にある一人の「パリサイ人」である。彼を支配するとともに、彼のもっとも内的な自由でもあるこの強制力は、服従を要求しながら他者に歩み寄って語る勇氣と権利を与えるものである。そこでは、他者に語らなければならない

自分の義務が、究極的には耳を傾けなければならない彼らの義務をも意味する、ということが前提とされるので、彼らの気持ちを害するのではないかということへの気遣いはいっさいない。

彼は、人間的な宗教的教訓ではなく、神についての知らせを伝えなければならない。それは、生き生きとした、その根源から絶え間なく新たに生じ続けている言葉であって、知恵を絞って考え出された、できあがった体系ではない。それは客観的な認識であって、体験や経験、知覚ではない。物事の本質における創造的で実り豊かなある洞察の知らせは、ただ単に聞かれるのではなく——聞かれることを欲するものであり、注意だけでなく参加を、知解だけでなく理解を、共感だけでなく共動を期待する。

まさにそれが神についての知らせであるからこそ、それは神についての昔からの思いつきではなく、歴史の成熟した収穫であり、それ自身古い時の果実であるところの新しい時の種子であり、預言の成就である。つまりその言葉は、預言者たちが彼らの言葉で指し示し求めたものであり、彼らの言葉の中に現象の本質として映し出され、今彼らの言葉の中に認識されうようになったものである。それによって我々は神の新たな時の始まりを、つまり古い時代の果実が実りを生みえる種子となり、長い間保管されていた預言者の言葉が、今現われる(16:26)のを認識する。「我々は引用を、歴史的な類比、つまり著者が自らの省察を通して類比に与えた意味によってのみ内的な関係がもたらされ、しかも生み出される衝撃が完全な類比関係に回収されてしまうような歴史的な類比としてだけでなく、互いに関連している著作を通して生じている有機的な展開における神の摂理についての教えと神政の歴史計画の生き生きとした瞬間と見なすことが許されているので、引用は自身の中に、時の完成の具象的な萌芽を携えるのである。」(J・T・ベック)。(3) ここで語るものは、躍動する歴史という土台の上に立つ。「彼はただちに改革者の栄誉を断固として断る」(シュラッター)。(4)

ここでは「我々の主、イエス・キリスト」が問題なのである。我々は彼を「キリスト」、救い主、イスラエルの王という名で呼ぶ。なぜならば彼においてい

しえの時代のかの諸々の言葉に属するこの言葉が語られ、彼において預言の成就が現れたからである。我々は彼を「我らの主」と呼ぶ。なぜならば新しい時の転換、その中に我々は立っているのだが、それが彼において起こったからである。彼は二つの世界、二つの歴史に属しており、彼を通して一方が他方によって遮断され、克服された。彼はかつて肉の世界においては、一方の時（Äon）の、そして人間的・此岸的歴史の部分の一つの構成要素であったが、今やある光の中でじっと見てみると、確かに暗闇の中ではあるが神の影という薄明かりの中においては次のようなものである。すなわち彼は、イスラエル人の神の国の民とその王族の一員なのであり、そのようなものとして神の約束の継承者であるのだが、またそのようなものとして彼の時代、一族、成就の恩恵にまだ与っていない世界全体の困窮と弱さの中に生まれたものである。彼はそのようなものであったが、今やそれは彼方に過ぎ去った。というのは彼がああ古い世界の構成要素としての彼の人生を終えたとき、彼の本来の内面的本質が死者の中からの復活において突然効力をもって現れ、存在の中へ新しいものを呼び寄せようとする神の意図に従って彼に与えられるべき地位が与えられたのである。それはすなわち、彼においてもう一つの人間の歴史が開かれるという、神の子という地位である。というのは、この一人の人間が神のゆえにあるところのものとなることで、すなわち、すべての被造物を捕らえていた死の呪縛が、彼の復活においてその有効性が明らかになったところの力によって解かれることで、——新しい時が、霊の時代が全世界のために始まったのである。この一回限り遂行された転換の光の中で、我々は以後のすべての事柄を見つめることを許されており、「聖霊に従って」、それに従ってのみ我々は以後彼を、すなわち彼の中で時の転換が生じたところのあの一人の人間を認めることが許されている。彼が預言書の中で準備され、そして今や開かれた神の、この世（göttlich-irdischen）の歴史の主人公なのである。

彼から出て来たパウロの「恩寵と使徒の務め」の両者があの一つのこと、すなわち、キリストの復活の力において今や初めて可能となった、新しい直接的無媒介的な感覚における神との個人的関係——というのは神の新たな感覚は、各人に

ではなく、世界に向けられているからである——全面的で明確な告知を通してこの力がすべての民の間で有効なものにさせるという使命はこの関係の中にただちに含まれるのである。信仰、それにおいて世界におよぶ神の誠実が人間にとって認識される、この信仰は、変えられた状況に相応しい服従を世界に要求するための、それ以上に服従を世界に贈るための、全権を自身の中に携えている。ある個人的確信の完成と普及が問題なのではない。「主の御名」が、暗闇の中をさまよう民のためのしるしとして光り輝かなければならないのである。〔イザヤ 9:1〕

そのしるし、使徒はその伝道師として世を渡り歩いたのであるが、その光に照らされたところに今ローマのキリスト者も立っているのである。キリストの中に突然現れた真実、それが彼を使徒にしたのであるが（1:1）、それと同じく強大な力が、彼らをすっかり変え、新たな時の流れの中に引き入れ、そして来つつある神の国のために彼らを占有するのである。「聖なる人々」として、彼らもはや彼ら自身と古く過ぎ行く世界には属しておらず、むしろ彼らを召し、新しい人間の系列の大きな希望を抱かせる始まりとして彼らとその愛の中に安らいでいるところのキリストに属しているのである。彼らは、キリストにおいて客観的で新しくされた神と世界との関係という礎の上に立っており、また立つように要求されているのである。つまり彼の恩寵の下（6:14）と彼の平和の中（5:14）に。これがローマ書の始めであり、終わりであり、内容である。

個人的なこと

8節 とりわけ、私はイエス・キリストを通して、あなたがたすべてのために私の神に感謝します。というのは、あなたがたの敬虔深いありようが全世界で語られているからです。⁽⁵⁾

「キリストにおける復活の業という手本から引き剥がされたものは、異教的世界の只中にある」（クッター）。⁽⁶⁾パウロには一つの明らかな成長、それは彼の助力なしになされたのだが、それを喜ぶことを許されている——そのことを彼は喜ぶのだ！彼らにキリストの呼び声をもたらしただであろう人は（1:6）、そうでな

くとも、彼らは呼び出されている。感謝するには十分な根拠がある。すなわち、墓の戸口から石は取り除かれ〔マルコ16:4を参照せよ〕、言葉は流れ出る〔II テサロニケ3:1を参照せよ〕、また世界の首都はもはやキリスト不在ではない。重要なのは、ローマのキリスト者たちの特別な美点ではない。彼らのためにパウロは彼の神に、それは彼らの神でもあるのだが、その神に感謝する。とにかく彼らがそこにあるということ（Dasein）、彼ら自身が重要なのだ。今問題なのは、特別な賜物が手元にあり特別な行いがなされたということよりは、むしろそれを別にしてキリストの御名が呼ばれ、知られ、そして神の国が近づいたことが信じられたということである。このことが生じる場所では、まさに復活の御力（1:4）が効力を持ち、まさにそのほかのすべての事柄が自らから生じてくる場所の土台が築かれる（1:8）。同じ賜物と使命の周囲に集められた人々は、非常に広大な世界において使徒とともに、この完璧で、それゆえに希望に満ちた事実を喜ぶ。（16:19）パウロは、たとえ彼ら個々人を知っていることを度外視したとしても、この事実によって、まずもって神において彼ら全員と結びついているのである。（16:3f）彼の主と彼に対してローマの扉が開かれているということ、彼は知っているのである。

9-10節 彼は長い間、あのような互いの結びつきを遠くからのみではなく、ともに喜びたいという願望を抱いていた。というのは、私の霊において御子の福音を告げ知らせることを通じて仕えている神は、私が祈るときには、いつもあなたがたのことを考えていることを、つまり神の御心によってあなたがたのもとへ行くことが、いつかはきっと可能になるように願っているということの証人である。⁽⁷⁾ 彼と彼らの間にある霊的または人格的連帯を実行すること、そのことを通じて成長し、深められることに、人間的な願望や意志が欠けているわけではない。人間がその真剣さの中に待っており、そのようになったということが、人間の目に見えるかどうかというのは、神の国にとって些細な問いではない。神にそれを請うことは、行うに値するし、正しい。我々は互いを知らずに済ますためではなくて、互いを知るためにキリストの兄弟たちの中にいる。パウロは実際にそ

れを求めて祈ったのだ[・]。彼のローマにいる友もまた祈るとき、今まで彼を彼らから遠ざけていたものは、人間的なものではなかったということを神の前で自覚するようになるだろう。しかし祈ることは神の意志を求めることを意味する。自分勝手に願われた決断の上に神の恵みはない。神の意志は、外的に与えられた現時点の状況と、キリスト者に与えられた義に対する感覚との、誠実に理解された調和において認識されなければならない(12:2)。そうであるべきものは、そのとき外面的にも内面的にも相応しいものである。パウロとローマにあるキリスト者たちとの出会いはいつか起こるべきであろうし、相応しいものになるであろう。しかし、普段はそれが最善であると互いに信じ、今後も神の意志を忠実に求めることが肝要なことである。これが目標により近づくための唯一の道である。

11-12節 私は、あなたがたに靈の賜物に由来するものを伝えられるかもしれないし、そのことによってあなたがたが強められ、それどころか私もあなたがたのところ、あなたがたと私がともに会うであろうところの信仰を通して慰めを見出しているがゆえに、あなたがたを訪ねることを熱望している。⁽⁸⁾キリスト者が互いに神の意志とともにあるときには、自分自身の道の上ではなく、彼らが行かなければならないその道の上にあり、そのときそれはおのずとそして確実に、彼らがそこから生き、そしてもう一度源泉であることを証明するための共通の努力のみをしばしば待つところの共通の起源から、知らせと告白へと至るのである。一方がすばらしく与える人であり、もう一方が受け取る人であるようなときには、同時に逆も成り立つのである。というのは、キリストの使徒は、あらゆる靈の優越にもかかわらず、聞くことなしに語り、教えられることなしに教えるような教師ではないであろう。すなわち、生き生きとしたキリスト教的人間が互いに兄弟のようであるところでは、両者の中では同じである靈の双方の運動が常に起こるのである。そこでは新人も定評のない者もまた能動的かつ創造的であることができ、そのとき、それはあなたからかそれとも私からか、ということとはもはや理性的には問われない。むしろ熟練者と初心者[・]の両方が彼らの人格的な弱さと否認の中で互いに慰め合い、そして信仰[・]が、つまり信仰の内容が、我々がその

下に立っているところの恩寵の開かれた入り口 (5:2) が、そこを通過して再び神の業が新しくされつつある世界へと流れ込もうとしているのであるが、その入り口がそこにあることが喜ばれるのである。この霊の共同の運動とそこから起こりうる結末のゆえに、キリスト者が互いに知り合い、出会うことは (1:10)、人間的なことについてのみならず、神の国にとっても同様に重要である。それ自体、あるいはまったくそのような共同の運動が意図的にその道の外で行われるならば、それは明らかに重要ではないし、むしろ無用で邪魔なものである。

13節 兄弟たちよ。あなたがたに知ってもらいたい。私はすでにあなたがたのところに行こうとししばしば企てた——しかし今までそのことが妨げられてきたのだが——、それは他の異邦人たちの間でも得たように、あなたがたの中でも重大なものを得るためである。⁽⁹⁾ このようにあの個人的な関わり合いに対する願いは確かに直接的な決意にまで進んだのであるが、その上ですべてのことが行なわれなければならない (1:10, 12:2) ところの神の意志の中に一度ならず、繰り返し妨げが、つまり使徒に当面は他の道を、すなわちまずあの礎 (1:8) が置かれなければならない町々や村々へ行くようにとの指示があった。それが彼の主たる務めであり、そのときまで彼をローマから遠ざけていた、処女地における種を蒔く者の仕事 (15: [20.] 22) なのである。しかし、兼職においてであれ、休養のためであれ、そのような共同の霊的運動においてあの彼が蒔いていないところで (1:12 [ルカ19:21を参照せよ]) 収穫をするということは、神の意志が彼にその喜びをいつか許されるまでは (15:31)、それは依然として憧憬または計画に留まるのである。

14-15節 私には、まさにギリシア人にも異邦人にも、教養ある者にも無知な者にも、果たすべき責任があり、そうであるからこそ、ローマにいるあなたがたに福音を伝えることも、私のまっただき望みである。⁽¹⁰⁾ あの願いがいつかは成就されるだろうという希望は、つまりところ全世界に対して (1:5) 彼に背負わされている義務 (1:1) に根拠づけられている。国境や文化の違いはきつと彼を思い留まらせないだろうし、そしてローマの霊的・宗教的に入り乱れた状況は、イコ

ニオムヤルステラのから来た人々の愚行〔使徒行伝14:1-20を参照せよ〕と同様に、彼にとってさほど重要ではなく、然るべきときに彼がその場所で自身の主題について語ることを妨げるものではない。キリスト者であるローマ人たちもまた、彼の個人的な召命のあの限界にもかかわらず（15:20-21）、結局のところは、彼が神のために肉と霊において義務を負っていることを知っている多民族で構成される大勢の人々に属しているのである。彼は新しいものを彼らにもたらさなければならぬのではなく、古いものを新しい仕方でも語り、そうすることによってただ一つなくてはならぬもの〔ルカ10:42を参照せよ〕⁽¹¹⁾の「記憶」を呼び覚ますのである（15:15）。そして彼らの側で、彼と多くことが語られる仕方をより知りたいという願いが明白にあるときには、まるで彼の口から共同の主題が語られているかのように、そして彼と彼らの中にある霊が神の福音を彼の思惟において開陳されたかのように、さしあたっては書かれた言葉が語るだろう。

主題（1:16-17）

というのは、わたしは福音を恥としないからである。しかしそれはまずユダヤ人を、次いでギリシア人を含めたすべての信じる者を、救済へ至らせる神の力である。というのは、神の義は福音の中で明らかにされた。つまり（神の）真実から（人間の）信仰へ。これは「わたしの真実によって正しい者は生きるであろう」と書いてあるとおりである！⁽¹²⁾

世界の首都においてよそよそしく、語られないままでおかれるような主題は、いずれにせよ福音ではない。そのことによって読者は、パウロもそうであったように、諸宗教や諸哲学の競争のただ中で内気になったり戸惑ったりする必要はない。それは競争に耐え、打ち破る。それはとある真実ではなく、当の真実そのものである。真実を認識する者は誰でも、その勝利をいかなる瞬間においても心配すべきではなく、その真実を認識することを許されていることをみなの前で誇るべきである。彼は他のもの、つまり人間的な精神的活動や宗教事業が弁明され支えられることを欲するのとは異なり、むしろ真理が彼を弁明し、支えるのであ

る。キリストに召し出されたもの(1:6)が神とともに恥じ、彼らの主題の成り行きを氣遣う——それは不可能なことだ！それが神ではなく、むしろその反対のものであるならば、神は我々の主題の成り行きを恥じるに違いない。神が行くのであって、我々が行くのではない。

キリストの死からの復活において神から出てきたのは力である。これが我々の背後に立ち、我々が何ものであり、何を考え行かうかということのすべてを度外視する。ここではどんな理論も立てられず、どんな抽象的な道徳も説かれず、どんな新しい儀式も勧められない。我々の下に現れるであろうものはすべて、人間的な添え物であり、宗教の危険な遺物であり、残念な誤解であって、主題そのものではない。そのようなものが問題になるときは、我々はもちろんあるときは「恥じる」であろうし、無競争の中には立っておらず、世界の諸力が我々との競争に入って来るやいなや、我々は世界に屈服するであろう。というのは、諸々の力(8:38)もまた世界の中にあり、それらは我々の観念よりも強いからである。しかし我々は観念を背後に持つのではなく、あらゆる力の力、それゆえにまたすべての観念の観念でもある神の力を持つのである。我々の主題とはキリストにおいて実現された神認識であり、その認識において神は具体的なものとしてではなく、無媒介的で創造的なものとして我々に近づき、その認識の中で、我々は見るとのみならず見られ、理解するのみならず理解され、把握するのみならず捕えられるのである。我々の神概念は生きた神の腕であって、その下で、自然、歴史、人間が、つまり我々自身(まず第一に「霊の初穂」(8:23)を得ているものとしての我々自身である！)が再び立てられるのである。常に主張され、知られ、見失われ、悲痛のもとで求められている源泉は、再びその口を開いた。あの「あれ！」〔創世記1:3〕という神の言葉は再び響き渡り、聞かれ、成就した。すなわちそれは何か新しいものではなくもっとも古いもの、つまり特別なものではなくもっとも一般的なことであり、歴史上のものではなく全歴史の前提である。それは常に理解しがたい自然現象(1:20)の中に隠されており、聞かれなかった預言者の言葉(16:25-26)の中に保管されていたが、今ようやく明らかにされ、その

結果今や再び原初のように人間の見、聞くところとなり、それによって人間がその頂点かつ中心であるところの世界の中に入ってくるのである。そしてその点においては古くから知っているものではなく新しいもの、一般的なものではなくもっとも特別なこと、単なる前提であるのみならず歴史そのものである。つまり新しい時の始まり、再び神が支配する世界の創造である。神のこの力が我々の背後にある。それが我が伝える福音である。それが我々の主題である。

神の力が今着手している仕事が創造である。というのは、人間がまったく現在の全世界において捕らえられている状態にあるからである。人間の神からの離反(1:18, 5:12)は彼をその源泉から遠ざけ、神を彼の敵となし、かつて神において結びつけられ、有効であった自然的かつ歴史的な世界の諸力は主人を失い、人間とすべての被造物は自分自身の不道徳(1:24)と死(5:12)の裁きの下に引き渡された。道徳観によって脱却されることも、敬虔さによって弁解されることもできない、絶望的にまでもつれた事態の結び目を、神は今やメシア的かつ神祕・此岸的な歴史の告白という実際の行為によって一挙に解いた。キリストにおいて人間は再び神のほうに向けられており、そのことによって失われたものすべての奪還の根柢が置かれる。我々はすでにこの出来事の始まりの中に立っており、神の自由の下にあるという状態への広い展望が開かれる(5:2, 8:18)。もはや裁きではなく恩寵の下に、罪ではなく義において、死ではなく生の中で、これこそが神の力が今我々と、そしていつか全世界とともに歩もうとする、また歩むであろう救済の道である。

今我々とともに！神の力を信じる(13)ことが問題なのである。つまり「パウロの核心」が！(ベンゲル)⁽¹³⁾。来つつある世界は機械的ではなく有機的にやって来る。そして有効になったはずの創造的な器官(Organ)は、達成されるべき目的の先取りである。つまりそれはキリストにおいて実行され、またキリストによって召し出された者において可能かつ現実になった結合と同様の、神と人間との自由な結合である。人間が、キリストにおいて語られた神の「然り」に対して「然り」と言うならば、そして神の力を通して与えられた新しい目と耳を用いる

ならば、世界と人間を見捨てるはずのない神の誠実がこれに応答すべく新たに呼び起こされた誠実と出会うならば、それが「信仰」なのである。そのとき救いが始まる。そのときキリストにおいて根拠づけられた世界の転換が続行する。それが戒律であり、福音によってすべての民に今伝えられ、そのことによって彼らが従うよう要請されている召命なのである（1:5）。思いやりの感覚、決断と確信の力、個人的な考え方の適性を正しく理解することは、信仰という出来事の重要な特徴ではない。人間の精神的な側面の上で進行することではなく、霊的な側面の上で進行することのほうがはるかに重要なのである。

信仰しているものたちが、今彼らの主題としての復活の力の周りに集まる、新しい超国家的な神の民を形成する。どんな人でもそこにいることができるし、いるべきである。信仰は世界の問いかけとなっている。約束と保管されてきた預言者の言葉の継承者としてユダヤ人は優位性を持っていた。救い主は彼らの只中に生まれたのである。つまり彼らが最初に救い主の知らせを聞いたのである（10:14-15）。しかしその後には知らせは異教徒へと流れ出て行った。「教会的」あるいは「世界的」な問いはもはや問いではない。到来しつつある世界はこの限界を知らない。ただ一つのこと決定する。すなわち再び明らかにされた神の力が今や信仰か、それとも不信仰かを見つけ出すことである。

このようにキリスト者が彼の主題に向かって立つところの意識と確信は、創造的で救済を与え、それ自身は世界を包圍している神の力に基づいている。神の力は、少しの曖昧さも許さないものである——何も新しいことをなしえず、それどころか結局の我々に同じところを回らせるように仕向けている、世界の諸々の力の一つではない。というのは、キリストを我々にとっての力となすものは、人間的な偉大さではなく、悪人においてでも善人においてでもなく、キリストにおいて再び明らかになった神の義だからである。神がこの一人の人物の中で救い主の手を世界に差し出すとき、神は御自身と調和して行為する。というのは、この一人の人物において、神御自身に対して相応しく、そしてその方法と一致している神に対する人間の根源的で直接的で正式な関係が、再び地上に現れたからであ

る。その中で神は、本来そうであるごとく、再び人間を支持することを表明するであろうし、人間の心象の中に御自身を再び知らしめるであろう。キリストの中にあった神の義は、彼の復活の力における秘密であり、またその力によって始まった世界の破滅からの救済の前提でもあるのである。というのは、キリストの服従において取り戻された、神に対する人間の直接性のみが墓の扉をこじ開けることができたのであり、そしてそのみが救済を現実のもの、つまり決定的に新しい一つの運動となし、あらゆる人間の運動が新たな罪や死へと逆行するのを防ぐのである。したがってそれは、神が今や再び世界のほうを向くところの愛であり、神が御自身および人間の状態を構成している要素との対立に陥るところの感傷ではなく、(神は人間の本質をキリストにおいてその「正しい」状態へ返すことによって)、むしろ地上における神御自身のもっとも内的な真実の告知と建設なのである。神はもはや人間の下にある不正に耐えることはない。神はその義が再び力を持つようになることを望む。それを求めかつそのような方法によって、神は人間をよその地から再び故郷へと呼び戻す救済の言葉をキリストにおいて発する。したがって、我々がキリストの復活の力を信じ、来つつある救済を喜ぶ場合、それは人間の側から見るならば、神的なものを自分勝手に騒ぎ立てて自分のものにして、それによって神の神聖にきわめて接近するといったことではなく、むしろそれは我々を次のことへと至らしめるもっとも厳密な意味での神認識である。すなわちそれは(すべての人間の恣意とは反対に、しかし人間の道徳性や敬虔さとも反対に)「イエス・キリストの御顔にある神の光輝の認識」(II コリント 4:6)であり、神のもっとも内的な本質の前に跪くことであり、キリストがそれに服従したように服従することである。それゆえ、何かではなくまさに神の義が問題なのであるから、神御自身が我々の主題を導くという確信を、我々は見誤ることはないのである。

しかしこれが、神がそれを通して解放されつつある言葉を語り、我々はその認識を負っている啓示である。「怒り」の関係、つまり神と我々の間にある「冒涇と不義」(1:18)の関係が破棄され、道徳と宗教の悲惨なまでに非生産的な誠実

が破壊され、神の救済の力が世界の中で有効になったということは、自明なことではない。罪深く死を免れえない人間が、本来あるごとく、キリストにおいては神に対して義とされたという判決を聞くことを許されていること、そしてこの判決（それは、真理の神が語る創造の言葉である）によって人間がそれを聞こうとするときには、義とされ生きるものとされるということは、奇跡である。そのように我々は神の力のもっとも内的な本質に関して、時の現実の転換の前に、秘儀の現われの前に、「長き世々を貫いて隠されてきたもの」(16:25)の前にまさに立っているのである。というのは、預言者でさえも生がやって来る閉ざされた扉の前でただ証言し、その現われを予言することしかできなかったからである。しかし、キリストの出現という歴史的出来事において表明されることの、人間を再び神との根源的かつ正の関係へと移す判決と認識によって、今や扉は自ら開いた。それゆえ、我々にとって福音の内容とは、一般的な真実の一つではなく、神による発見であり、すなわち眠っている性質の一つではなく、行為の対象であり、それゆえ確かに人間の側での発見の可能性であり、この行為に向けて常に準備されている神の側での用意なのである。キリストにおける神の義の現実(Wirklichkeit)が福音における新しいものなのである。

神の誠実が人間の中に信仰を見出し、あるいは神が人間を再び信じ、一つの誠実との出会いが生じるのは、神との自由な結合においてである。この新しいものは天からやって来て、地上に根を下ろす。人間の服従行為における神の行動、つまり、承認し受け入れること、捕らえられ把握すること——これは啓示に対する信仰の態度である。「長く世々を貫いて隠されていた」もの、神の中にのみあり、人間の中にはないもの、それは今や神から人間へ突入し、人間のところでもっとも自由な神の行為として生起し、またその中で彼のもっとも固有な本性の発見として生じるのである。そのようにして、神は御自身で地上における力の器官を生じさせる。その誠実な神は、信仰深いものたちの信仰において再び世界に対する動的で創造的な関係の中に入ったのである。

そのようにして我々の主題の中で預言者の預言が成就する。つまり、「誠実か

ら義とされた者は生きるようになるだろう」。また次のように言うこともできる。「信仰によって義とされた者」と。これらは同じことを意味している。というのは同時に神がすることと人間がされることが重要だからである。今や再び神の義は、キリストにおいて語られた、解き放たれつつある言葉を通して、またキリスト者たちの中で実現された認識を通して地上に立てられた。そして支配的な神の「怒り」の下で、また人間の「冒涇と不義」の領域の中で、死が地上でもっとも強い力を持っているはずであるのと同じように、あの神の義の建設を通して生の芽が再び歴史と自然の中に与えられたのである。今や人間の世界史の中に神の世界史が広がる。そしてその中にはもはや死が存在しないであろう新たな創造が今始まったのだ〔黙示録21:4を参照せよ〕。

夜

離反（1:18-21）

18節 というのは、神の怒りは今まで、真実を彼らの不服従の枷で縛っている人間たちのあらゆる不敬虔と不服従とに対して天から啓示されるからである。⁽¹⁴⁾

どのような人間の態度も、そしてそれによって生じているどのような状況も神に対する一つの関係である。そこで問われることになる。それはいかなる関係であるか、と。我々はいつも神を「持っている」が、しかし我々が欲するような仕方神を持っているのである。信仰は救済の力へと我々を運び込み（1:16）、それゆえに、それとは反対に無関心や不信心、拒絶、反抗は、最終的には死が待ち受けている（1:32）ところの自惚れ（1:24ff.）へと我々を導く。我々は神を、キリストにおいて我々を支え持つことを明らかにし、実際の救済としての彼の動的な言葉を、我々や我々の世界において展開させる神として持つことができる。しかし我々はまた、我々が自分たちの道を行かしめ、またそのことによって生じざるをえないあらゆる実際の帰結をもたらしめる神として、神を持つことができる。

神はそれ自身変わることはない「永遠の力と神性」（1:20）の中にいる。彼はかつてそして今も我々が従う主であり、その中には死が存在しない生の主であ

る。しかし神に対して可能なのは負の關係である。というのは、神との自由な結合において、つまり神は機械的ではなく、我々を捕らえかつ我々によって理解されることを欲しているからである。神との自由な共同体からですら、人間は不道德なものとして生まれることも可能であり（9:20b-23）、そのとき、人間は、誠実さをもって自発的に神の手に我が身を委ねるようとはせずに、神に対して誤った、不誠実な、強情な態度を取るのである。そのとき、離反と放棄の時が告げられた。そのとき、我々の神（我々の主であり生の贈り主である。生は神なしではありえない！）に対する關係は、我々を疲弊させ死に至らしめるものとなる。ただ原因を見さえすれば、我々は結果を知るのである！「神によって創り出された生のいかなる妨害も損傷も、死の運命を内包する被造物の生のすべての衰弱と拘束であるのだが、それらは人間の罪に対する神の反応なのだ。」⁽¹⁵⁾ 神の中では、いかなる怒りも否定され、欠如することはなく、むしろ神の創造主たる愛こそが否定され、それゆえ欠如せざるをえないのであり、我々にとって怒りの裁きとなる。つまり、塞がれた生の源泉は、死の原因となる。神は我々に内面的かつ直接的に近づくかわりに、外的かつ異質な、石像の客として⁽¹⁶⁾脅迫的に相対して「天から下って」きたのである。そして神の義が信仰を見つけるときには、ただちに我々とともにある道を打ち壊すように、明白な目的を持つ運動と期待できる成長の中へと我々を移し（1:16）、その結果、我々は神の怒りによって明白な流れの中で段々と、（完成しつつある神の国が光を投げるように！）今やすでに前方へと影を投じている決定された死の判決に向かって連れて行かれるのである。

従来、神の怒りの下にある世界は、「人間の冒流性と不義性」によって特徴づけられている。世界を全面的に救済する神の義の力が人間の信仰とともにその行使の最初の一步を踏み出すのと同様に、世界の上に神の怒りを引き寄せる決定的でもっとも重大な神に対する反抗が人間の中で起こる。人間の「冒流性」や「不義性」において、この反抗の二つの正反対の要素が互いに会おう。根源的で永遠なもの代わりに有限で被造物的なものを崇拜するための、神的な者に対す

る終わりのない憧憬の中で、人間は自分自身を無駄にし失うのである。すなわち、ついには誤った敬虔は内的には不敬虔にまで高められるのである。これが人間の「冒瀆性」である。そして人間はあの正当な欲求の只中に没入し、自分自身が正しくあることを欲し、そのみがか正しく、正当であったものを無視しようとするのである。そのようにして誤った道徳は、矛盾のない不道徳、プロメテウスの神の権利の強奪とされる。これが人間の「不義性」である。それは人間がその下で彼の世界のすべてが苦しまなければならないところの、人間のあの反抗なのである。すなわち、人間はいつも神を求めながら偶像を見つけ、いつも神に仕えようとしながら、常に自分自身のために自力で生きようとし、そして両方において、神そのものを失うのである。この反抗の上に神の怒りはあり、むしろこの反抗こそが、その展開における(1:22以降)神の怒りの裁きの啓示に他ならないのである。神が神として認識されず、人間が自ら神になることを欲することで、人間と神の間に負の関係が生じており、神による永劫の罰が告げられたのである。つまりそのように方向づけられた人間とその世界は見放され、この方向性から生じるすべての結果が無造作に見捨てられてしまうのである。

それではこの反抗のもっとも根底にあるものとは何か。どこから神と偶像との、また人間自身とのこの致命的な混同は生じるのか。その始まりは常に人間の不義の行為である。まず初めに人間は自分自身を失い、次いで偶像を失う。間違った敬虔さと不敬虔は、間違った道徳と、不道徳の所産である。人間の行為、つまり「自分自身と自分の意志に対して冷たく生きる」⁽¹⁷⁾ことは、「監禁」であり、殻を作ることであり、よく知っている真実の追放である。人間は神を知っているが、その知識を神がその中で実際に力を発揮しているであろう認識にまで至らしめることができない。人間は真実を知っているが、彼はそれを知ることを欲さず、そのとき真実は現実となることができない。人間は神を自分自身の人格となし悪意をもって関係づける。神について考えるべきことを、人間は自分自身について考える。神に差し出すべきものを、自分自身に与える。神が人間にとってそうあろうと欲するものが、人間自身となっているのだ。このように人間は真実

を捕縛し、真実からその誠実と影響範囲を奪い、無害で無駄なものにし、真実を不真実に変える。この不義の行為から、人間が自身の像にならって偶像を作るという冒涇性が生じ、このことによって人間は繰り返し逆方向に呼び出されるのである。というのは、人間自身が神になるとき、主を失った世界は必然的に偶像で溢れることになり、また世界に偶像が満ちるときには、ますます人間は長い間偶像の中の唯一の神であるかのように、あるいは影絵の中の比類のない真実であるかのように感じるのである。人間が神から権利を奪い取るという不道徳から、もはや神を持たない非宗教がその結果として生じる。そして非宗教は常に新しい不道徳を生み出すだろう。このようにして神に対する我々の反抗の二つの要素が互いに作用し合うのである。我々が真実に関して行なう束縛と虐待が、我々を神の怒りとの衝突の中へと連れて行く、この反抗のもっとも内的な本質なのである。

19-21節 というのは、神についての考えは彼らに知られており、神がそれを彼らに知らしめたからである。神の不可視の本質、つまり神の永遠の力と神性は世界の創造のときから理性によって神の業の中に現れているために、彼らはいかなる弁解も持たないのである。というのは、彼らの神についての知識にもかかわらず、彼らはそれに対して神として敬意と感謝を示さず、むしろ彼らは彼らの確信において霊を失い、彼らの無知な心はそれを曇らせたからである。⁽¹⁸⁾

神についての概念は、我々自身の存在と同様に直接的に与えられている。それゆえ我々が神に反抗するときには、外から我々のところへもたらされた何かに反抗するのではなく、我々自身から生じようとしているものを抑圧するのである。つまり我々は縁遠いものに対してではなく、我々のもっとも固有な本性に対して知らないと言うのである。人間はその根源から離れるのではなく、むしろ根源についての記憶は人間のあらゆる思考、意志、感情の中で、警告と忠告として、また本来的なものとして、故郷をしのばせるものとして、人間の希求の中心として、また人間の道の前提と目標として同行するのである。人間はこの記憶を抑圧してしまったために、非本来的な行為を犯す。それによって彼は神に対してのみならず、自分自身に対しても不誠実になるのである。

というのは、神は目を向けられえからである。我々はそのことを忘れてしまった。我々はそれに再び語らせなければならない。我々にとって神の不可解性はその本質を構成する一つの要素となったときには、神と我々の間にある物事は本来の状態にはない（11:33以降）。「初めからそうではなかった」〔マタイ19:8〕。「神の不可視性は神の本質のうちにあるのではなく、それは隠れていることであり、隠れていることは神の神聖さと我々の非神聖さに基づいている。我々はそのことを自身に言わなければならない。というのは、我々は靈的であると主張するほどに、我々にとって常に可視的なものがより現実のものに、不可視的なものがより完全に現実でないものに関係するのである」（ツェンデル）。⁽¹⁹⁾ 実際に我々はただちに可視的なものの鏡像の中にまったくの現実を、つまり神の不可視の本質を確かに見ることができるといふ状態にある。内側なしに外側はなく、本質なしに現象はなく、「永遠の力と神性」なしに「業」はない、それらはそこから出て来るのである。そして人間自身は生来その中にあり、その本質における物事を見て取ることができ、永遠の力と神性において自身の本来の源泉を持つのである。というのは「世界の創造」以来、物事の中に存在する「神の不可視的な本質」は、また人間の中にも存在するからである。つまり見て、同時に見られ、知り、同時に知られ、思惟し、同時に思惟されるものである。それ自体で存在しているものはなく、すべてのものはただ我々が見、知り、思惟するものである。それ自身から生じるものはなく、生じたものすべては靈を通して、理性を通して、言葉を通して、我々が見て取るものを通して生じるのである。初めにここに存在していなかったならば、そこにも存在しない。すべての物事の中で自身を再び認識するこの創造的なもの、見ているもの、靈的なものが我々の中にあり、物事の中にある知恵が容易に、そして最初から一つであるということ——すなわち、それらはどこからきたのか、ということを知っている知恵が我々の中にある。「神はそこに至る道を知っており、そのある所を知っている。というのは、神は地の果てまでも見そなわし、天の下にあるものすべてを見やるからである。」（ヨブ28:23-24）神は我々の目から姿をのぞかせ、我々の尺度の尺度であり、

我々の思考において思考するがゆえに、我々は「自然の内部」⁽²⁰⁾において同時に我々自身を見て取り、我々自身において神の不可視の性質を、すべての像の原型を、すべての観念の観念を、すべての力の力を、すべての真実の中の真実を見るのである。万有は創造的な理性から生じるがゆえに、またこの創造的な理性は我々にとって見慣れぬものは何もなく、むしろ我々自身の中にあるがために、それゆえに我々は「神についての考えは彼らに知られており、神がそれを彼らに知らしめたからである」と言うのである。

またそれゆえに、我々がそれを認識として効力を発揮させないときには、あるいは神は計り知れないものだと言って、我々がまるで神が神ではないかのように冒瀆のかつ不義的（1:18）にふるまうのであれば、我々はいかなる弁解も持っていないのである。神との正の動的な共同体を求めないことと再び失うことは、不運ではなくて罪である。そのような態度の上に示されなくてはならない、また、我々が今日その中に万有があるのを見るところの（5:12;8:19-22）破綻の中に現れる神の怒りは、運命ではなく厳しい必然である。我々の誤った敬虔さには弁解の余地などない。というのは、創造主の業は我々の理性に向けて不可視の神の「永遠の力」について語り、それによって我々が神を有限で可視的で派生的な力と同等に扱う偶像崇拜に対してあらかじめ抗議するからである。我々の誤った道徳には弁解の余地はない。というのは、我々の理性は、すべての影と些末事を超えて神の「永遠の神性」にまで、また人間のすべての独善、自己尊重、プロメテウスの幻想がその前で沈黙せざるをえない神の無競争の威厳にまで、上昇しようとする衝動を生来持っている。我々が偶像と我々自身のせいで自らを失ってしまったこと、我々が真実を監禁状態にしてしまったこと、我々が神の中にある自身の故郷を離れてしまったこと、それらの原因は、我々に他の可能性がなかったからではない。「神は私たちの誰一人からも遠く離れていない、なぜなら我々は神の中で生き、働き、存在するからだ」（使徒17:27-28）。神によって立つならば我々は違った状態であったであろう。

しかし今や我々のせいで、人間の歴史と、それとともに世界の歴史は神によっ

て辿るはずの経過を辿らないのである。我々の中にある直接的な神認識の種子は、収穫に至る前に、効力を発揮する前に抑圧されてしまった。才能や能力、素質からはいかなる現実も生じない。それは知識のままであって、認識は生じないだろう。我々は神の永遠の力と神性を無視しながら、諸観念の観念から一つの「最高の」観念を、すべての物事の本質の代わりに孤立した観念体系を作り出すのである。それどころか物事の本質の中に我々を立てる代わりに、それを空虚な抽象概念として我々自身と世界に対して立て、可視的な「業」を生じさせ、それが存在するところの創造的な霊から不可視の实在を業の隣に作り出し、とりわけ生の源泉からあるひとつの生の要素を作り出す。我々は光を神の光の中で見る代わりに〔詩篇36:10を参照せよ〕、神をある一つの光にし、神なしには光を存在させることができないとしても、独自の光を灯し、それをもっていない物事の中で独自の光を求める。我々は神の永遠の力に光榮を帰することを拒否する。我々は自身の宗教的幻想の中で、それを一貫して（もしそれがもはやすべての物事の力強い存在でないのであれば、一体それは何なのか？）繰り返し消し去り、背後に押しやり、最終的には無視するために、まず様々な自立した諸力を永遠の力の隣に承認し、様々な相対的な神的なものたちを起源たる神の隣に立てる。そして我々は神の永遠の神性に当然帰されるべき感謝、つまり我々の絶対依存感情の意識⁽²¹⁾を捧げることが拒否する。というのは、同様に一貫して（それでは、とりわけ我々に対して権威を持たないある神とは何なのか？）、宗教と道徳からの念入りな別離を超えて、神が我々自身の偉大さの中に消失する地点まで到達することを求めて、まず神と並べて我々を「自律的に」立てるためである。

聖なる火にもえる心よ

すべてはおのれ自身の行為にほかならぬのだ……

おれはここにいる

おれのすがたに似せて

人間をつくる

おれとおなじ種族をつくる
 なやむことも 泣くことも
 たのしむことも 歎息することも
 おまえを崇めぬことも
 すべてがおれと同様の人間をつくる

(ゲーテ)⁽²²⁾

光が我々の中で暗闇になった後で、現在の世界の状態は本来あるべきものではなくなった。つまり、それらに対して人間もばらばらに独立して同様に無意味に相対しているところの暴力が無意味に支配している⁽²³⁾現存在に。神御自身の思惟が我々の考えと信念を、霊と生気と現実で満たすことができなくなった後に——「直観のない概念は空虚である」(カント)⁽²⁴⁾——我々の思惟は虚ろになった。主観的な詭弁は、常にあらゆる個別のことに対して正しいが、非常に慎重であったにもかかわらず全体においては結局誤っているというところから生じる。警句的なひらめきも綿密な思案も、その両方が不毛であることを余儀なくされている。なぜならば、それらには神の言葉の豊かさも推進力も初めから欠けているからである。そして我々の感覚は暗く、曇ったものになった——「概念のない直観は盲目である」(カント)——、というのは、方向づけも意見もなしに、不確かさと偶然に委ねられているために、我々は十分な目を持たずにこの状況を目の前にし、印象を処理することを可能にする霊的な背景が欠けたときから、また物事の中に知恵をもちや見ることができなくなり、知恵がそれ自身からなくなったがゆえにただ物事を見るのみであったときから、哀れでむき出しの精神的な存在は我々の「分別のない心」を、それを規定している印象の真ん中に連れて行く。これが我々の離反である。

転落 (1:22-32)

人間は神の力の中に立ちえた。しかし人間はそれとは違うことを望んだ。

あな[・]た[・]た[・]ち[・]は[・]天[・]上[・]の[・]光[・]を[・]あ[・]び[・]て
 や[・]わ[・]ら[・]か[・]な[・]し[・]と[・]ね[・]の[・]上[・]を[・]あ[・]ゆ[・]む[・]、[・]し[・]あ[・]わ[・]せ[・]な[・]精[・]霊[・]た[・]ち[・]よ[・]、
 か[・]が[・]や[・]く[・]そ[・]よ[・]風[・]は
 か[・]る[・]く[・]あ[・]な[・]た[・]た[・]ち[・]に[・]触[・]れ[・]る[・]、
 た[・]お[・]や[・]め[・]の[・]指[・]が[・]き[・]よ[・]ら[・]か[・]な[・]弦[・]を[・]奏[・]で[・]る[・]よ[・]う[・]に[・]。……

だ[・]が[・] わ[・]た[・]し[・]た[・]ち[・]は[・]定[・]め[・]ら[・]れ[・]て[・]い[・]る[・]、
 ど[・]こ[・]に[・]も[・]足[・]を[・]や[・]す[・]め[・]る[・]こ[・]と[・]が[・]で[・]き[・]な[・]い[・]よ[・]う[・]に[・]。
 過[・]ぎ[・]て[・]ゆ[・]く[・] 落[・]ち[・]て[・]ゆ[・]く
 悩[・]み[・]を[・]負[・]う[・]人[・]の[・]子[・]は[・]、
 ひ[・]と[・]と[・]き[・]ま[・]た[・]ひ[・]と[・]と[・]き[・]と[・]。
 も[・]の[・]ぐ[・]る[・]お[・]し[・]い[・]谷[・]水[・]が
 岩[・]か[・]ら[・]岩[・]に[・]な[・]げ[・]う[・]た[・]れ
 は[・]て[・]は[・]そ[・]の[・]跡[・]も
 知[・]ら[・]れ[・]ぬ[・]よ[・]う[・]に[・]。

(ヘルダーリン)⁽²⁵⁾

自身が偉大になるために (1:18)、人間がその鈍重な手を真実の上に置いて、それを監禁することは、報いを受けるのである。そのような行為に附随すべき神の怒りは、内的な歪みと外的な崩壊の中に、人間的な生の宗教的荒廃と道徳的墮落の中に明らかにされる。神の影は、もはや彼の光の中で清く存在することを望まない世界の上に重くのしかかる。

22節 彼らは自らが賢明であると思いついでいるのに対して、愚かになった。⁽²⁶⁾これが今や起こった人間の転落のすべてである。神は神として認識されない。今や結果が示された。その後ろに神が立ち、また神に向けられている、見ること、知ること、思惟することに、主である霊と似ていると理解する自惚れた知恵が取って代わった。⁽²⁷⁾神から与えられた理性の紛れもない基準に従う代わりに、ま

た神々しく輝く理性が絶対確実な基準に従う代わりに、あるいは創造主の業における神の不可視の本質を謙虚に見つめ敬う代わりに、その敬虔に基づく誤った確実性を高慢にも信頼して、恣意的で空想的な絶対視と熱狂によって始められ、結局は同じくらい恣意的なニヒリズムに終わるのである。主観的で自然主義的な敬虔さを生み出す。このようにして我々の「冒瀆性」は勝ち誇り、罰せられるのである。そしてそれは、個人の中でただちに起こる倫理的・社会的混乱から、我々自身をひそかに神の立場にまで押しやった、我々の「不義性」を生じさせる。「私」を王座へ押し上げるための知識の封じ込めと悪用が生じた。まず始めに内的生(1:21)において起こったように、今や外へ突き抜け、偉大な文化および道徳という虚言として歴史の中に現れたのである。つまり、人間はその反抗によって神の「あれ！」に反するもの、すなわち、起こりうるくだらないことのすべての闘技場、世界戦争の現場、愚か者の住処とならざるをえない。

23-24節 そして彼らは、不滅の神の光栄を、はかない人間や鳥や獣や虫けらの形に似た像と取り違えた。⁽²⁸⁾これが内的人生の歪みの第一段階である。人間の意識において、神の不滅性、根源性、超越性と、物事の無常さ、相対性、従属性の間にある区別が曖昧になっている。人間は、自身が神の子孫であること〔使徒17:29を参照せよ〕を認識する代わりに、神を物事の平面にまで引き下ろし、自然的、歴史的生の存在様式の中に引き込むのである。すでに神はひそかに退位させられ、故郷を追われており、当惑しきった状況において今や人間はある時はこの、またある時はあのという具合に神ではないものを神の代わりにし始める。創造の業を突き抜けて神の不可視の本質へと進むべき人間の理性は衰える。神との直接的な認識関係は緩み、間接的で派生的なものとなる。人間の洞察力は、略奪された自立と独自の実情に立ち向かう霊的・自然的力によって、抑えられ、曇らされる。それでもなお人間は神のようなものを探し求めることをやめることができないがゆえに、彼にとって欲求ないし畏怖の対象として、また彼の存在の助けとなる推進者として、あるいは彼独自の思惟と行為の結果と成果としてただちに重要であるものを、あるいは自然とのやり取りにおいて、または彼の心に偶然に

触れ、神性となる人間の歴史の展開において、彼にもっとも強烈な印象を与えるものを求めざるをえない。今や神の栄光は、ユピテルやマルス、イシスやオシリス、キュベレーやアッティスという不十分な形で、人間がその似姿において曖昧な尊敬をささげるところの国家や文化や自然、富や「人格」、芸術や学問、教会や徳から引き出された栄光で満足しなければならない。混同、作り話的な錯誤、悪い誤解が今、人間の神に対する関係の特徴づけている。世界を照らしている神の光の致命的な変敗が生じた。実り豊かな神の力、つまり根源は秘密になり、根源から引き剥がされた、個別で、主を失った力と支配(8:38)がその代わりとなり、未だになお神の称号で装わせているが、それはこの称号を根拠づけるはずの力強い存在を欠いているのである。神は今やもはや神ではなく、もはや完全に超越したのではなく、もはや君主ではなく、むしろ我々の偶然の「体験」のみすぼらしい対象なのである。神はもはや御自身を我々の中には認識させず、むしろ我々が自分自身を見て取る鏡であることを、我々は熱望するのである。そして神の怒りが計画を上手くいかせるのを見るがよい。そのようにして偶像は立てられるのである。

それゆえ、神は彼らをその不純な心の欲にまかせ、そうして彼らは互いの体を辱めるようになった。⁽²⁹⁾ 神を引き下ろすことは彼ら自身に対する罰となった。主観的に歪曲された神の像を立てることは、生きる神の側から見れば神から引き剥がされ我々が神性として崇拝する諸力への放棄であり、それによる本来的な人間の存在の歪曲である。イスラエルは彼らが熱望していた王を得た(サムエル記上8を参照せよ)、見捨てられた息子は父の財産を得た(ルカ15:12を参照せよ)、マルスは時間を支配し⁽³⁰⁾、そしてウェヌスーキュベレーは我々が彼女のために建てた王座にのぼり、富が世界の支配者となり、我々は「人物」となり、「国家が我々を所有する」(ナウマン)⁽³¹⁾、そして文化が我々を侵食し、芸術や学問、教会それ自体が目的と内容になるのである。この企ては成功する——彼らが望むとおりに、まったく「彼らの心の欲望に従って」成功する——、そしてそれこそがまさに「転落」なのである。というのは、人間が神と並べて立てた相対性の奴

隷と玩弄物になったからである。さらに汚された神性はもはや人間を支え保たず、もはや人間を、神への洞察の不純を通して人間の生を包む「不純」から守ろうとしない。神がその光栄を失ったので、人間もまたそれを失う。我々の中で理性はもはや務めを果たさないで (1:20)、我々の肉体の中でも、我々を手足として能動的・受動的に万有と結びつけ、我々が世界の関係を規定し、世界の関係が我々を規定する器官でも働かなくなる。ただ神のみがそこを通して出入りすべきであるこの門の下に、自分自身で選び出された神々が今どっかりと座っている。それ以外ではありえない、というのは「目は体の光である。もしあなたの目が澄んでいれば、あなたの全身は明るくなるが、あなたの目が悪意のあるものであれば、全身が暗くなる。もし今あなたの中にある光が暗闇であるならば、そのとき暗闇はいかに大きいことだろう！」(マタイ6:22-23) そのように、人間は、彼の人生が編みこまれている世界の成り行きのあるゆる不名誉をもたらすに違いない。資本主義、軍国主義、国家主義、そしてあらゆる邪悪な「一主義」を、「個人の生」⁽³²⁾、僧侶気質⁽³³⁾、偏狭な教養、芸術のための芸術 (l'art pour l'art) を、そのすべてを経験するに違わ^{ない}し、それを嘆き、ときには部分的に呪い、そうではあるが彼の神の理性に対する孤立において繰り返しそれらすべてを新たに生み出すに違いない。そうして人間の「不義」(1:24)は「冒瀆性」(1:23)と並んで、またそれとともに神の怒りの下で自ら罰へとすすんでいくのである。

25-27節 さらにそのとき彼らは神の真理を虚偽に変え、造り主の代わりに、造られた世界を崇拜し、それに仕えた。——造り主こそ永遠に褒め称えられるべきものである。アーメン。⁽³⁴⁾ 神に反する発展が進行している。本来はよく知られた真理において、我々の理性の前に立っているような神の像が、諸概念や諸力の中の多数の中に解消し、粉々になり、消えてなくなるということは、変えようがない。偶然の、あたかも戯れのような取り違いから、重大な混同が生じる。隠された、十分に知られていない神との対立は根本的なものとなった。盲目にされた目は病む。誤謬から虚偽が生じる。試しに王座につけられた諸力や諸権力はその場所に馴染んでしまい、「永遠の力と神性」の光の輪に囲まれ、一方で、主が、

本来の現実が、ますます色あせ、ますます抽象的に、理論的に、無意義になり意識の背後へと後退し、もはや精神世界上の多種多様な重要な事柄や栄光についての生気のない宗教上の上位概念となってしまった。また主がそのような不必要なものになる間に、実は人間が主からすでに独立していたのだった。現実も神も今やおぼろ気に、不確かに、非現実的に現われた——それに対して非現実的なもの、神から離された世界に、確実性の後光がさし、必然的で現実的なものとなる。ここに神学が！ここに自然科学が！二つのうちどちらがそれに関してより悪く、また困った嘘をつくのだろうか？すでにただ不安定で貧しくなってしまった思惟は、今やすっかりその本来の対象のそばを通り過ぎてしまったのだ。そして神における存在からこぼれ落ちた世界は、もはや神の隣には立っておらず、むしろその立ち位置へと入り、自らが神となったのだ。「我々は自身の宇宙のために、古来の敬虔な人が神に対して持っていたような畏敬の念を要求する」（D・Fr・シュトラウス）。⁽³⁵⁾ そのときこの神＝世界で、すなわち神なしの世界の内側で、自然と文化、唯物論と観念論、資本主義と社会主義、俗世と教会、帝国主義と民主主義という巨人が互いに空位の王座の周りで互いに闘争へと立ち上がる。

「天に住むものは彼らを笑い、主は嘲る」（詩篇2:4）。そして主は、主であり続け、光と闇の交代を持たず（ヤコブ1:17）、人間の取り違いや混同によって触れられることのない光の父であり続ける。

それゆえ、神は彼らを恥ずべき情欲にまかせた。女は自然の性関係を不自然なものに変え、男もまた同じように女との自然の関係を捨て、互いにその情欲に燃えた。男は男に対して恥ずべきことを行い、そしてその迷走の当然の報いを、自分自身の身に受けたのである。⁽³⁶⁾ 「不義性」は「冒瀆性」（1:25）とともに彼らの反抗と彼らの罰の頂点に向かって行く。彼らは自身が賢いと思えば思うほど、愚かになるのである。神なしの自然が不自然や異常として現われる。同じ尺度で、自然的・歴史的な生が神として抽象化されたために、この生はその意味を失う。神の真実が現実から締め出されたために、現実は屈辱と恥辱になる。酷い悪習にお

けるその悪魔的な戯画に対するもっとも単純な視点の取り違えは、ただちに神と世界についての取り違えと合致する。人間は神の側を通り過ぎてしまったので、人間は今や自然の側をも盲目的に駆け去ってしまうに違いない。真実に反してそれらを取り違えている虚偽と呼応しながら、人間は意識および潜在意識においては迷宮であり、狂った創作物である生を受け入れなければならない。今や異常なもの、倒錯したものが重要になった。今や精神分析が言葉を捕らえる。偶像崇拜は、偶像がまるで神であるかのように今支配することによって、自身を罰する。それはそのようにあり、またそのように作用する。その結果、人間は彼の宇宙とともにそこにいる。創造主——霊から引き剥がされた物質は再び混沌に向かって滑り落ちるのである。

28-31節 神に対する反抗の究極的な結果が導き出されなければならない。いかなるときも神の沈黙の承認はなお非常に誤った敬虔さのほうを向いている。それどころか人間は彼らの偶像の中で神を求め、非現実の中で現実を思い、無を何かであると思い、そして誤った基準の適用は意識の基準を裏切るのである。またこのことも隠され破棄されうるのである。愚かな知恵は放縦な主観主義の中に、誤った敬虔は不敬虔の中に、指針を失った良心は分別のない心の中に今倒れるのである。そして彼らは神認識に対する感覚を失ったので⁽³⁷⁾（彼らはもはやそれを必要なものだと思うが、そもそも客観性を見込むことができず、悪用され、力を奪われた理性がただちに感覚や経験、体験を超越しているものすべてを品定めし、この行動を詭弁的に正当化するために用いられるのである！）神は彼らに無能の理性にまかせ、⁽³⁸⁾ その結果、彼らは不可能なことをなしとげ、あらゆる不義、無益、貪欲、險悪⁽³⁹⁾、嫉妬、殺意、口論、詐欺に満ち、陰口を叩く者、誹謗者、冷酷漢、傲慢な者、自慢し法螺を吹く者となり、卑劣なことを次々と考え出し、親に背き、無認識で無特徴、冷酷で容赦のない者となった！ そのようにして、人間の不義も無神論の完成とともに生の完全な空虚と混迷へと進行するのである。今や理性はその有効性と尊厳を失い、それ自身、理性を欠いたものとなった。つまり、今やすべてが心理学的に観察されうるのである。一切の敬虔な

る畏怖の綱は解けた。⁽⁴⁰⁾ 世界は完全に個々人の横暴と社会的不義に開かれた。そこに客観性があるために、いかなる共同体ももはや不可能である。生は自身に害を及ぼす機械的な生に、動物のそれよりも激しい現存在をとりまく闘争へと引き込まれ、墮落した文化の悪魔的な行為によって悪化させられ、社会のしるしとなる。今やすべてが可能になり現実となった。横柄な観察者は確認し、道徳家は批判し抗議し、愚かな者は無視をする。それは神の怒りのもとに、不義の時にあり、また起こらなければならぬということについては、何ものも変えることはできない。

32節 それは起こらなければならぬのか？ 人間は実際に見るべきだったか否か、理性を持っていたのか否か、神を見るべきだったか、それとも見知らぬものとなったのか？ 人間は彼の離反と墮落に気づかず、後悔しなかったのか？ 否、まったく違う。彼らは、そのようなことに駆り立てられる者は死に値するという神の秩序をよく知っていながら、それを行うだけでなく、みながそのようになるのを是認していたのだ。生を崩壊させ、打ち砕く人間が選び取った道の特徴は、まったく明白な不信仰の無理性と不道徳の狂気である。しかしもっとも内的で究極的なことは、我々がそのすべてを肯定し、意志し、続行し、是認し、場合によっては擁護すらすることである。

このように完全な逆説と不幸が、人間自身の中に、彼が迷い込む自己矛盾の中に横たわっている。この矛盾の上に神の怒りがたれこめているのである。

注

- (1) K. Barths Manuskript zu: *Der Römerbrief*, Bern 1919¹ (im Karl Barth - Archiv, Basel) (以下、Mskr. と略す)：「パウロ、イエス・キリストの僕は、使徒に召し出され、神の喜ばしい知らせのために選び出された。この知らせは聖書の中で神の使徒たちによってあらかじめ約束されていた (vorausverheißten) ものであり、——すなわち神の御子についてのものである。彼は肉においてはダビデの血筋から生まれ、死からの復活から出ずる聖霊においては力強く神の御子に定められた。すなわち我々の主であるイエス・キリストによって、彼を通して我々は彼の御名によって全ての異教徒らの間で——彼らの中にあなたがたもまたいるのであるが、信仰の服従を生じさせるために、恩寵と使徒の務めに招かれているのであるが、イエス・キリストへ

と召しだされているのである。ローマにいる全ての神に愛された人々、聖徒とされた人々へ。恩寵と我々の父なる神と主イエス・キリストからの平和があなたたちとともにあるように。」

- (2) Fr. Zündel, *Aus der Apostelzeit*, Zürich 1886, S.350 :「この『意に反して』(Iコリント9:17)とは、欠くことのできない性質である、というのは、自身の創作に熱中し、あまりに意欲満々で自分の役目を果たそうとするかの天才に対する直接的な防壁として、『意に反して』という性質が働くからである。」
- (3) J. T. Beck, *Erklärung des Briefes Pauli an die Römer*, hrsg. von J. Lindenmeyer, 2. Hälfte, Gütersloh 1884, S. 139f., Amn. :「この関連において我々は引用をただ歴史的類比として見なすことが許されているだけでなく……」
- (4) Vgl. A. Schlatter, *Der Römerbrief ausgelegt für Bibelleser*, Calw/Stuttgart 1887¹, S. 8 :「もし彼が改革者で、特有の『パウロ的な』福音を考え出したのであれば、彼はその意見を退ける。」後の版ではこの文はない。
- (5) Mskr. :「というのは、全世界においてあなたがたの敬虔深い在りようが認められているからである。」
- (6) H. Kutter, *Der Römerbrief als Katechismus*, in: *Der Kirchenfreund. Blätter für evangelische Wahrheit und kirchliches Leben*, Basel, Jg. 28 (1894), S. 353-359. 369-376. 385-391; Zutat S.370.
- (7) Mskr. :「というのは、私が神の御子についての知らせを告げることを通して私の霊において崇拝している神は、私に、私が嘆願する際には絶えずあなたがたのことを考えており、いつかは神の意志によってあなたがたのところに行くことができるように求めていることを、証して下さる。」
- (8) Mskr. :「私は、あなたがたを強める霊の賜物に由来するものをあなたがたに伝えられるかもしれないから、むしろ私が、あなたがたと私の中にある信仰を通して、あなたがたによって励まされるかもしれないから、あなたがたのところへ行くことを熱望している。」
- (9) Mskr. :「兄弟たちよ、あなたがたに知ってもらいたい、私はしばしばあなたがたのところへ行こうと企てた——そのことは今日まで妨げられてきたのだが——それはその他の異邦人の間でと同じように、あなたがたのところでも重大なことを喜ぶためである。」
- (10) Mskr. :「私には確かにギリシア人にも異邦人にも、教養ある者にも無知な者にも義務がある。そしてだからこそ、ローマにいるあなたがたに喜ばしい知らせを伝えることも、私のまっただき願いなのである。」
- (11) バルトが1916年3月にアーラウで創世記15:6について行なった説教に「唯一必要なこと (*Das Eine Notwendige*)」という表題が付されている。それらは *Die XX. Christliche Studenten-Konferenz Aarau* (Bern, 1916年) のS. 5-15に掲載されている。
- (12) Mskr. :「というのは、私は『喜ばしい知らせ』を恥じないからである！それは信じるものすべて、つまりまずユダヤ人に、そしてギリシア人のためにもある救済へと至らせる神の力である。というのは、神の義はその知らせの中で自身を開いた

〔後に『現れた (enthüllt)』に改訂された〕のである、つまり（神の）誠実から（人間の）信仰へ。それは『誠実によって義とされたものは誰でも、生きるのである！』と書かれたとおりである。——πίστις という単語をあるところでは（神の）「誠実 (Treue)」と、またあるところでは（人間の）「信仰 (Glaube)」と訳すという、バルトの決断は、彼のいところであり、牧師、のちにバーゼル大学の新約聖書学の助教授となったルドルフ・リーヒテンハンの往復書簡に軽視できないものとして貢献した。リーヒテンハンは1917年5月30日にローマ書1:17についてバルトに次のように書き送っている（手紙の原本はバーゼルの Karl Barth-Archiv にある）。「ここで私は最初、πίστις を神の性質として理解したために、有名な聖書解釈者の証言 (dictum probans) も調達できなくなってしまった。私はこれを誠実 (Treue) と訳す、それは第一コリントで数回使用された πιστὸς ὁ θεός という文言に相当する。それは、神はアブラハムに与えられた約束と預言者たちによって前もって伝えられてきた福音に誠実にいまし続ける、ということに本質がある。……人間の πίστις は、人間が神の πίστις を頼む、ということに本質がある。」バルトは『ローマ書講解』第二版の前書きでリーヒテンハンを「この改革の霊的父」と呼んでいる (Römerbrief 2, S. XVI, 後の版では S. XVIII)。Vgl. R. Liechtenhan, *Zur Frage nach der Treue Gottes*, in: *Kirchenblatt für die reformierte Schweiz*, Jg. 34 (1919) S. 192f. リーヒテンハンは πίστις を「神の誠実」とするバルトの訳を、ローマ書に対して意見が一致しているという立場から、P・ヴェルンレの、πίστις が神の誠実であるというバルトの「発見者の喜び」のあまり、バルトは議論の展開においてあまりにも偏った帰結に至った、との批判（彼の論評、*Der Römerbrief inf neuer Beleuchtung*, in: *Kirchenblatt für die reformierte Schweiz*, Jg. 34, 1919, S. 163f. 167-169）から弁護している (S. 192)。

- (13) J. A. Bengel, *Gnomon Novi Testamenti*, Tübingen 1850³, S. 42 (zu Röm. 6, 18): «Centrum Paulinum, FIDES».
- (14) Mskr.: 「というのは、神の怒りは、不義によって真実を阻んでいる人間の不信心と不義の上に天から啓示されているからである。」
- (15) Th. Zahn, *Der Brief des Paulus an die Römer*, Leipzig 1910², S. 87: 「というのは、すべてのもの、その中では敬虔な者も神の創造主の行為の証明ではなく、神によって創り出された生の妨害や損傷を知ることができるのである、つまり死の運命を包含する被造物の生の衰弱と拘束において、彼は人間の罪に対する神の反応を……知ることができるのである。」草稿ではこの文は著者表示なしに後から欄外に追加されている。印刷の際にバルトは誤ってこの引用に Fr・ツュンデルの名を付してしまつた。この誤りは後の版を通して伝えられた。
- (16) L. da Ponte/ W. A. Mozart, *Don Giovanni*, 2. Akt, Finale 1 の暗示。
- (17) この引用元を特定することはできなかった。しかし、Fr. Von Schiller, *Turandot* (nach C. Gozzi), 1. Aufzug, 1. Auftritt を参照せよ：

地獄へと、もっとも深い深淵へと
この生まれながらの怪物とともに、
彼らは冷たく主のない人生をただひとりて歩むのである！

- (18) Mskr.: 「というのは、神は彼らがよく知っている真実の中にいましたもうたから

だ！神自身がそのことを彼らに知らせたもうた。だがその不可視の本質、その力と神性は世界の創造以来、思考を通して神の業の中に現れているので、彼らはいかなる弁解も持たない。なぜならば、彼らが今、神を認識しているにも関わらず、神に神としての敬意と感謝を示さず、むしろ彼らの理性の類において霊を欠き、理解を示さない心をくもらせたからである。」

- (19) A. a. O., S. 351 : 「……我々が霊的であると主張するほどに……」
 (20) Vgl. J. W. von Goethes Gedicht «Allerdings» :

「自然の内部へは——」
 おお 何たる俗物！
 「いかなる人間も参入することはできぬ」

《日本語は、ゲーテ『ゲーテ全集1』、片山敏彦、大山定一、富士川英郎、高安国世、井上正蔵、会津伸、生野幸吉、野村修訳（人文書院、1963年）、284頁、に従った。》

- (21) Vgl. Fr. Schleiermacher, *Der christliche Glaube*, Bd. I, Berlin 18312, § 4 u.ö.
 (22) Aus dem Gedicht «Prometheus» von J. W. von Goethe.
 (23) Vgl. Fr. von Schiller, «Das Lied von der Glocke» :

暴力が無意味に支配する処には
 如何なる構成も形をなさない

《日本語は『シラー選集1 詩・小説』新関良三編（富山房、1941年）、116-117頁に従った。》

- (24) カントの認識論の原理についての有名な文言である。z. B. bei Vorländer, *Geschichte der Philosophie*, Bd. II, Leipzig 1908² (PhB 106), S. 194 : 「直観なき概念は確かに空虚であるが、概念なき直観は盲目である」。Vgl. I. Kant, *Kritik der reinen Vernunft*, B 75 (Kant's gesammelte Schriften, hrsg. von der Königlich Preußischen Akademie der Wissenschaften, Bd. III, Berlin 1904, S. 75) : 「内容なき思惟は空虚であり、概念なき直観は盲目である。」「日本語は、カント『純粹理性批判（上）』篠田英雄訳（岩波書店、2008年）、124頁に従った。》
 (25) Fr. Hölderlin, «Hyperions Schicksalslied», auch in: *Hyperion oder Der Eremit in Griechenland*, 2. Band, 2. Buch. 《日本語訳は『ヘルダーリン全集3 ——ヒュペーリオン、エムベドクレス』手塚富雄、浅井真男訳（河出書房新社、1966年）、134-135頁に従った。》
 (26) Mskr. : 「彼らは教養があると主張する一方で、愚かになった。」
 (27) Vgl. J. W. von Goethe, *Faust I*, V. 577-579 und V. 512f. (Nacht) :

君たちが各時代それぞれの精神とよんでいるものは、
 結局のところ、その時代の影を映している
 歴史家先生自身の精神さ。……

お前はただ、お前の頭で考えた霊に似ているだけで、
わしには似ても似つかぬ！……

《日本語は、『ゲーテ全集3』山下肇、前田和美訳（潮出版社、1992年）、25、23頁に従った。》

- (28) Mskr. : 「そして彼らは不滅の神の栄光を、死すべき運命にある人間の像との混同によって、歪めたのである……」
- (29) Mskr. : 「それゆえ神は彼らをその不純な心の欲にまかせ、彼らは互いの体を辱めるに至った。」
- (30) Vgl. Fr. von Schiller, *Wallensteins Tod*, V. 2 (1. Aufzug, 1. Auftritt).
- (31) Fr. Naumann, *Werke*, Bd. 5, Köln/Opladen 1967, S. 543 (Der Kriesszwang, Hilfe, Jg. 21, 1915, Nr. 38) : 「一般的な兵役義務には強力な拘束力がある。それは、この世のあらゆる最高善を超えて、個々の人間の生を超えて、国家を君主とする。……人は彼にとって生業が戦争よりも重要であるかどうかということに対して決定権を持たない。彼が自らの現存在の形成者であることをやめたために、彼が始めた生涯の仕事をまず終えたいということを大声で叫ぶことは許されていない。国家が彼を所有しているのである。」
- (32) ヨハネス・ミュラー（1864-1949）は「Blätter zur Pflege persönlichen Lebens」を、1914年からは「Grüne Blätter」を出版した。バルトとミュラーの間のやり取りについては、Bw. Th. I, S. 537 und II, S. 732 (Register) を参照せよ。
- (33) Vgl. L. Ragaz, *Neue Wege V. Das Pfaffentum*, in: *Neue Wege. Blätter für religiöse Arbeit*, Jg. 11 (1917), S. 392 : 「我々の世界を毒しているあらゆる災いの中で私は何が最悪のものだと思うか、と人が私に尋ねたとき、これだと思うものを私は知った。私は軍国主義だと言うのか？ それとも資本主義だろうか？ あるいはアルコール中毒だろうか？ 売春だろうか？ いや、私がこの人間の災厄に対する闘争に私の人生の力の大部分をかけ、そしてこれからもかけるであろう、他のものを間髪いれずに挙げるだろう。すなわち、僧侶気質であると。」
- (34) Mskr. : 「そうして彼らはさらに神の現実を虚偽によって歪曲し、創造主の代わりに造られた世界を崇拜し、それに仕えた。——創造主こそ永遠に褒められるべきである、アーメン！」
- (35) D. Fr. Strauß, *Der alte und der neue Glaube. Ein Bekenntnis*, Bonn 1873⁴, S. 147.
- (36) Mskr. : 「それゆえ神は彼らを恥ずべき情欲にまかせた。女は自然な関係を不自然なものに変え……彼らの過ちに対する当然の報いを受けたのである。」
- (37) Mskr. : 「そして彼らは神認識をその身に保つことを、不必要であると考えたのである……」
- (38) Mskr. : 「そして神は不必要な目的に彼らを任せた」
- (39) Mskr. : 「不義、邪悪、陰悪、貪欲」
- (40) Vgl. Fr. von Schiller, «Das Lied von der Glocke» :

最早や一つとして聖なるものは無く、
一切の敬虔なる畏怖の網は解け、

《日本語は『シラー選集1 詩・小説』新関良三編（富山房、1941年）、118頁に従った。》